



季節を知ったら 暮らしが楽しくなった

〔第三六〇号〕

大雪たいせつ

十二月七日

和釘

今年も最後の月、十二月を迎えました。師走の声を聞くとは急にあわただしくなります。そろそろ年賀状の準備や大掃除も、と気持ちだけは急ぎます。

おかげ横丁の建物は、ほとんどが瓦屋根の木造建築。さぞメンテナンスが大変だろうと思っていました。こうした伝統建築に欠かせないものを知りました。「和釘わくぎ」です。一般に広く使われている丸い軸じくの釘は、明治時代に海外からもたらされた「洋釘」です。それまでの日本では職人が一本いっぽん手で打った（鍛造たんぞう）の、角張った太い軸の和釘が使われていました。

その歴史は遙か飛鳥時代までさかのぼり、法隆寺の金堂で使用されたものが最も古い和釘といえます。和釘は打ち付けた際に出るさまざまな形の頭（頭部）が、建物などのデザイン性をも生み出していました。

例えば、おかげ横丁にもある竹製の矢来やらい。京町家などでよく見かける犬矢来は、町家の壁や格子を汚さないように考え出された、竹材で組んで作った囲いです。そこに、和釘が使われていました。小さな楕円形の頭は、巻頭釘かんとうぎでしょうか。注目すると、きれいに並んで打ち付けられていることがわかります。ほかに、看板などを吊るすための鉤形かぎがたに曲がった折釘、お手洗いの目隠しになっている竹垣にも和釘が使われていました。

おかげ横丁の和釘は、伊勢市大湊おほみなとの久住商店で作られているものでした。大湊といえば造船の町。かつて和船を作る際には、この和釘が欠かせませんでした。職人が一本ずつ打つ鍛造の和釘は表面に微妙な凹凸ができるため、表面積が大きくなり、木によくなじむといわれています。昭和三十年代まで大湊には造船を支える鍛冶集団かじがありました。それは、日保見山八幡宮にある水饗神社みあえの常夜灯に深く刻まれた「釘問屋」の文字と、ずらりと並ぶ鍛冶屋の名前からうかがえます。現在は一軒となった和釘の鍛冶屋。それでも、その灯は続いているのです。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○『歳としの市』

新年の「明けましておめでとうございます」という言葉は、年が明け、歳神様としがみを迎える際の祝福の言葉でした。つまり、お正月は家に歳神様を迎えお祝いする行事です。歳神とは1年の始まりにやってきて、その年の作物が豊かに実るように、また、家族みんなが元気で暮らせる約束をしてくれる神様です。正月に門松やしめ飾り、鏡餅を飾ったりするのは、すべて歳神様を心から喜んで迎えるための準備です。おかげ横丁では、昔ながらの風習に触れる、お正月の文度「歳としの市」を開催いたします。

日 時／12月11日(土)～12月28日(火) 10:00～17:00

場 所／おかげ横丁一帯

※雨天および諸事情にて、中止または内容が一部変更になる場合がございます。

● お正月のお飾り市

縁起よく新年を迎えていただくための、しめ縄や松竹梅の鉢植え、ミニ門松などのお飾りが並びます。

日 時／12月11日(土)～28日(火) 10:00～17:00

場 所／おかげ横丁内 特設屋台

● もち花作り体験

お正月飾りには欠かすことができないもち花。今年も豊作であるようにという願いが込められています。かつては、花の咲かない真冬に彩り添えるささやかなアイテムでした。白餅と黄色味を帯びた栗餅を使い、金銀に見立てた伊勢地方独特のもち花を作ってみましょう。

日 時／12月18日(土)～20日(月) 11:00～16:00 ※所要時間 約40分

場 所／おかげ横丁内 特設会場

料 金／1,500円(税込)

● ミニ門松づくり体験

門松は、今では正月の飾りのように思われていますが、元々は歳神としがみの依代といわれ、神霊が下界に降りてくる時の目標物と考えられていました。おかげ横丁で作る小さな門松を机の上や玄関口に飾ってお正月を迎えましょう。

日 時／12月18日(土)、19日(日) 10:00～16:00 ※所要時間 約30分

場 所／おかげ横丁内 特設会場

料 金／一基 800円(税込)、一門 1,600円(税込)

お問い合わせ／おかげ横丁総合案内「おみやげや」 電話0596-23-8838

五十鈴塾

○『伊勢流神楽の行方』

ある時期には日本人の6人に1人が伊勢参りをしたという江戸時代、お参りから宿、食事一切を一手に引き受けて仕切ったのは御師と呼ばれる人々。

外宮内宮合わせて800家以上あり、莫大な権力と富を手にしていました。

明治になって廃絶されその痕跡はほとんど残っていません。今は神宮でおこなわれている神楽の奉納もその当時は御師の館などで催されていました。

今の神宮神楽は明治6年に宮内庁楽部の指導を受けた舞楽です。では御師の館でおこなわれていた神楽はどんなものだったのでしょうか？

断片的に残っている絵図から推察すると湯立神楽をはじめいろいろあったようです。もはやその名残はどこにもないのでしょうか？

と き／12月21日(火) 13:30～15:00

講 師／櫻井 治男(皇學館大学名誉教授)

参加費／一般1,400円 会員900円

場 所／五十鈴塾右王舎

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

※新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止となる可能性があります。

五十鈴茶屋

○『節気菓子』

ゆず
柚子

柚子は、古くから日本人の暮らしの中で親しまれてきた柑橘類です。

そのすばらしい香味をお届けします。

村雨生地仕立ての彩りも爽やかな一品です。

ほ がき
干し柿

伊勢路の家々の軒下に吊るされる干し柿は、初冬の風物詩のひとつです。

柿銘を餅生地で包み、干し柿の姿をそのまま写しとりしました。

ふゆ
冬なごみ

師走のきびしい寒さの庭にほっこりと千両万両の赤い実が目にとまります。

二色のきんとんで粒銘を包みました。

心なごむ冬の情景です。